奥山

自第十六
至第二十

157
合
107イ

157-107イ
1200901383332

第十六

157
107

紀元二千五百九十二年版

奥山

第十六

奥山會刊行

磯谷紫江氏

昭和九・六・一三

大堅ひ勧化
勧化

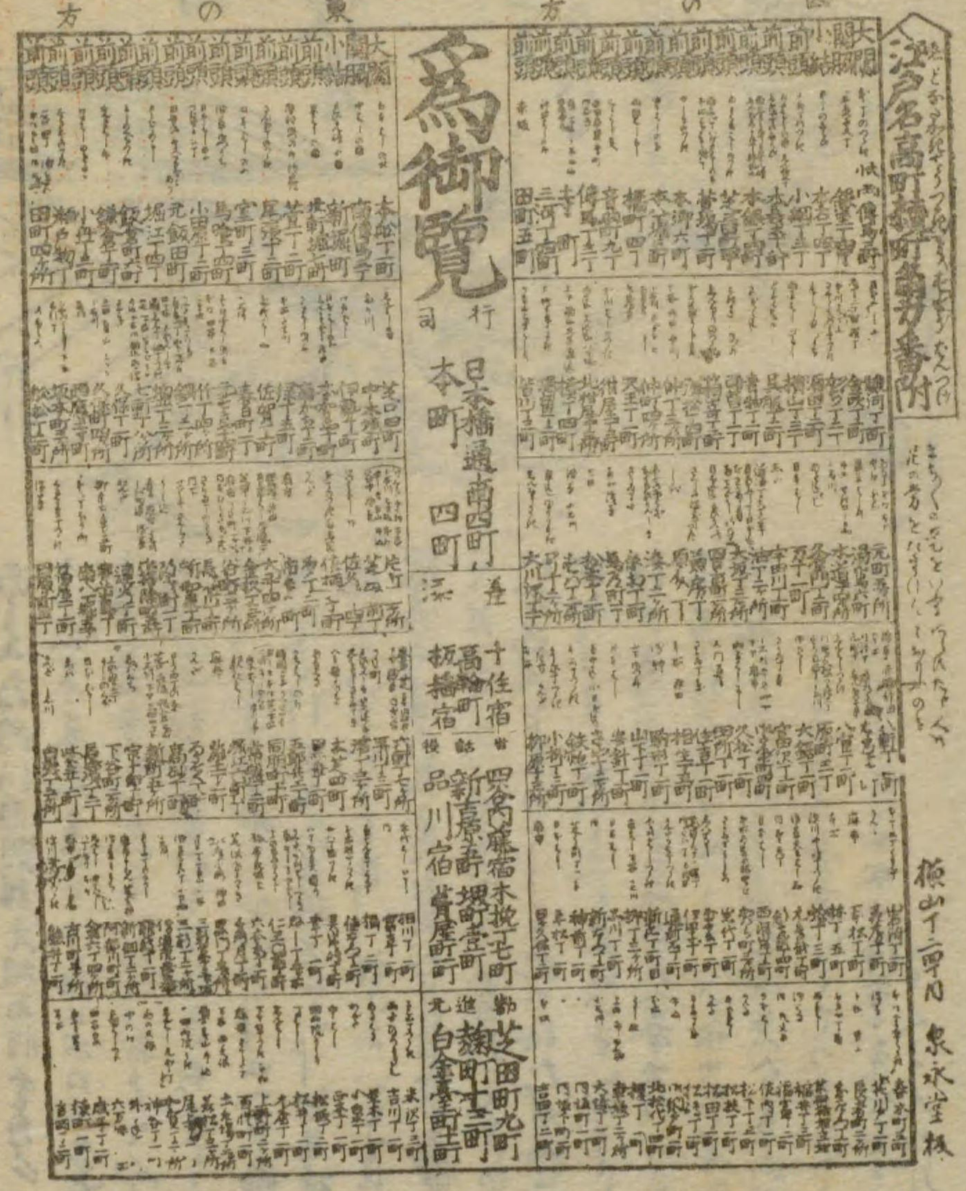
雷神門之退

七福神
不動
北斗
毘沙門
大黒
北辰
寿老人
大山
弁財天
金毘羅
歌麿
北斗
門
大吹
出立
北辰
寿老人
亀工
板元
芳藤
伊勢藤

仇討の次第

安永六丑年
十一月二十八日
御蔵前にて
親仇討

[illegible]州[illegible]村百姓金[illegible]と云
申者年来忠[illegible]いたし候所不[illegible]不[illegible]なる
ところ忠日[illegible]の忠[illegible]いたし[illegible]をまねんど
此者先住金右衛門のとまねきあまりい
たしハどり森がいといふしハへむ[illegible]
けいきり候ぎいま妹をおふじどまねき
ほどのいさいともおし[illegible]おいもてハハ
勝右衛門ハ忠[illegible]を[illegible]いたし[illegible]
そち[illegible]もハさいハ[illegible]べしハ[illegible]のち
ハむ[illegible]んともらしくれハ[illegible]たのみ[illegible]
おふじすハおつと[illegible]もたのいさいとくし
江戸表へまうりお武家方へ奉公住いし
一ヶ年程中しすとうかいハ[illegible]の[illegible]
御蔵前にてだし[illegible]兄金[illegible]の
かたきと名のり合あいにてつきたおし
兄の仇を打しる女に稀なる孝心なる
すへの人なりと[illegible]



後苑莊消息

四月五日。千葉氏に逢ふ。例の村瀬氏との事件益々險惡となる。牛込の『末よし』に宴會あり。九時○氏と菊水へ、十五分にて共に別れ、三本氏をたづれ、ほぼ、話纏る。『五七九一』

四月六日。澁谷より川島へ、話未だまとまらず泊。

四月七日。拓川氏をたづれて、『藪忠』にて、蕎麥がきをたべる。丸行燈のもとにうたたねをする。皆線停電のため圓タクにてもどる。

四月八日。數寄屋橋の石黒より三ッ本氏へゆく、話の成行をきく、二時すぎとなり泊る。

四月九日。七時すぎ三ッ本氏をたづれる。未だ話纏らず、そのままとなる泊る。

四月十日。正午すぎ、話進行、九時話實際となり、午后十一時すぎ全く話解決する。一時すぎ歸莊。

四月十二日。邦文舍にて夕飯をとる。

四月十三日。上野より電話をかけてみる。五樂に立寄つて、花袋の菓子皿を求める。

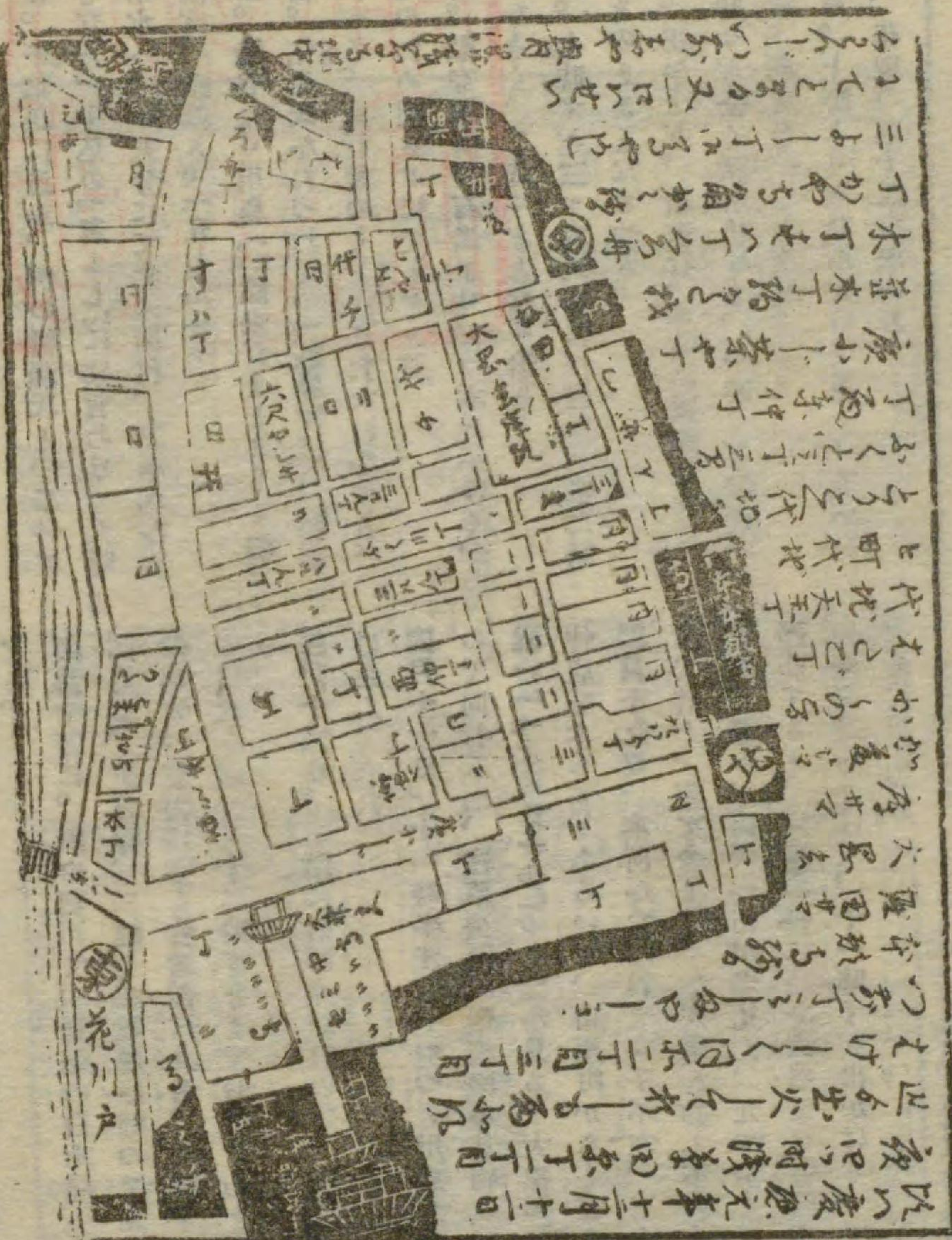
四月十四日。夕、千葉氏をたづれる。二時すぎもどる。

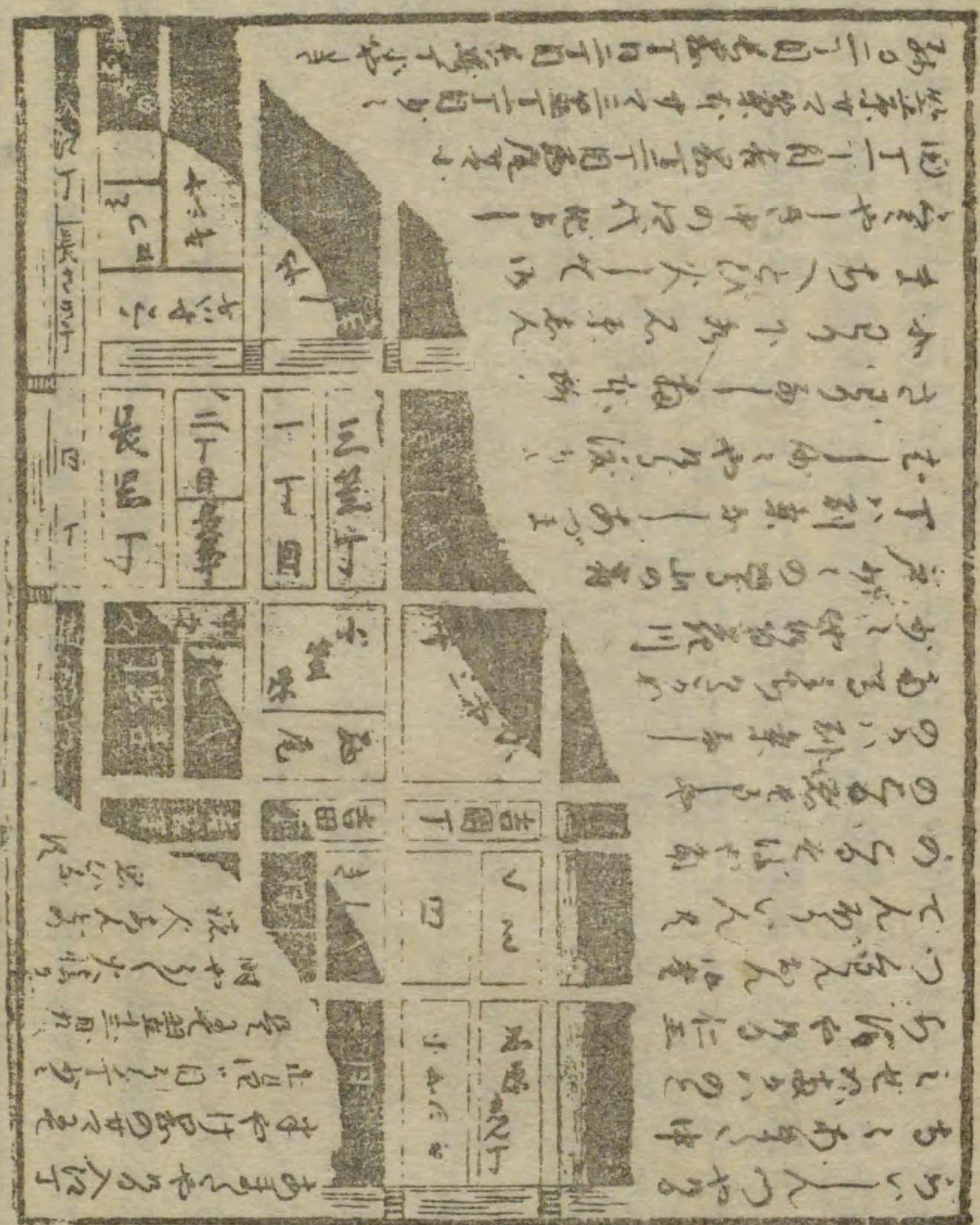
四月十五日。雨中初めて、新築の白木屋へゆく、高島屋、伊東屋、三越、松坂屋を廻つて五時すぎ雲水會の會場にゆく會者僅に九名。九時すぎ會散、根本氏を送つて十二時すぎまでお母さんと共に語る。

四月十六日。二階に灯がついたので、千葉氏は駈け込んで來た。

四月十七日。十一時半すぎ、やつと用意が出來たので同行五名、淺草公園の帝國座を見物『足輕は强い』『上陸第一歩』の二篇を見る。大黒屋で中飯仲店をぶらぶらあるいて、田原町からもどる。

四月十九日。本所をたづれて秀子不在、三十分位にて辞し、邦文舍より、拓川老を訪ふ不在その足にて藪忠へ、同所へ拓川老見え、九時半まで快談歸莊すると、戸籍の件につき渡邊より電話あり、一應電話をかけて、十一時すぎ出かける。二時すぎまで語る。


花川戸



頃は慶應元年十二月十二日夜四ッ時淺草田原町一丁目邊ゟ出火して折しも西北風はげしく同處二丁目三丁目門前丁みしまやしき本願寺殘る堀田サマ大岡兵庫サマ加藤サマ少々のこるはたご丁代地天王丁上町代地とりこへ代地ふくとみ丁三間丁西東仲丁廣小じ茶や丁並木丁駒かた材木丁すは丁くろ舟丁かや寺角少々殘る三よし丁御馬やがしにてとまる又一口はせいぐわんじ門前じや骨湯淺草寺地中

らいしん門やける寺々あまた中みせは兩かはのこらずやける仁王門くわんおん御堂でんぼういん共のこるそばや角のこるゑぞうしやのかは別條なし南馬みちかたかは少々やける花川戸少々のこる山の宿丁は別條なしあづまばし少々やける渡りにさわりなし扨本所は北わり下水石原しんまちへとび火して御くみやしき中の郷代地よし田丁一丁目吉岡丁二丁目西尾サマ小笠原サマ篠本サマ三笠丁一丁目少々殘る二丁目長岡丁同二丁目長崎丁小やしきあまたやける入江丁半やけ岡のサマにて止ル四ッ目うら丁少々是にて翌十三日九ッ時やう〳〵火鎮り諸人あんどの思ひなす

佐原行 (一)

廿五分しかないので、城南自動車を、ひた走らせに走らせた、ガソリンは0となつても補給せず、交番に斷るところも、斷らずに走らせ、走つたものだ、日暮里驛前についたがマダ約束の八時には十分前であつた。誰も見えないので、省線のホームに行つて見た、石井君と二三惠さんが見えてゐた。京成電車のホームに來て、ヤヤ暫くすると、寂星庵が見えた、八時をすぎても、永江氏が見えず、二十分すぎて、ヤット見えた、これで一行が揃つて、成田行の電車に乘込む。京成電車で日暮里驛から乘車するのは、今日が初めてである。

成田に着いて、スグバスが出るので小便の用意も急がしい、二三惠嬢などは、すでに乘り遲れるところ、ヤット助つた、手を洗ふなンと云つてゐるから駄目だ、柄にもない上品振ると、置去りにされる。たまにはよからう。

佐原町にヤットついた、自動車もなかなか時間がかかり、少し窮屈であつた、徒歩『川島』へゆくまへに、郵便局に立寄つて、五月一日日付の風景スタンプをとる。モウすでに正午間際であつた。川島をたづねて、休憩、お母さんと、妻君に出逢つて、悔みを述べる、妹分のハシヤグ女のとりもちで

座はしらけた、自動車をやとつてもらひ、觀福寺にゆく、國寶金銅佛三体がある、銘に、弘安五年八月と刻する釋迦如來座像、延慶二年三月と刻する、十一面觀音座像、藥師如來座像の二体共に大正二年八月二十日國寶に編入せらる。

境内に、伊能忠敬の埋髪塔、並に、國學者たる伊能魚彦、節軒及び顯剛の墓がある、忠敬の碑面には

表面

有功院成裕種德居士

右側面

文政元丙寅之稔四月十三冥

とある、魚彦の碑面には

表面

正定院遊觀玉泉大姉

光雲院揖浦魚彦居士

青松院稚水貞操大姉

右側面には

正　延享四年丁卯　五　月十一日終

光　天明二年壬寅　三　月廿三日終

青　安永八年己亥十一月廿二日終

また山上の墓地には尊海以下歴世の墓碑がある。尊海の墓碑には『下總國大戸庄牧野村觀福寺開山尊海比丘、寛平九年丁巳五月二十八日寂』と刻するものあるも疑はし。

永江さんは、金銅佛をカメラに納める。奥庭に、最近掘出されたと云ふ、慶長八年慶長十八年と刻した五輪塔を見たが、これは少し研究を要するものと思つた。

まだ、見足らぬところ、かずかずあれど、それは、また他日に讓つて、けふはこの程度で辞し去ることにした。

自動車は、香取神社に向つて境内に一巡、香取神宮域外、小林氏宅地内にある飯篠家直墓を撮影。

碑面には

『長威大覺位飯篠伊賀守、長享二年四月十五日』と刻す、此地は古へ梅木山不斷所址なりと。

また、多古町大字飯笹地福寺境内にも同氏の墓がある。

日曜の午后は休業の香取郵便局にゆき、特に懇願して、風景スタンプの押捺をゆるされた。

車は町にもどつて、伊能忠敬先生の舊宅を訪ふた、書齋は、そのままに遺つてゐる。地圖や、測量器械などを見せて頂いた、ここで紀念撮影をする。

一旦、川島へもどつて、入浴、夕飯を濟ましバスの終車で、歸京することにした。

震災記念燐票

當卯六月廿八日ヨリ日數六十日之間

於自坊令開帳者也

畧　緣　起

淺草

幸龍寺

抑當山に案置し奉る元祖日蓮大菩薩は中老日法聖人の眞作なり頃は弘安五年九月十八日甲斐國身延山を御立出ありて武州池上右衞門大夫宗仲が宅にて臨二滅度一と きの御暇乞に鎌倉の弟子檀方を集め廿五日より立正安國論の御講談始り其時の折伏御面體を其儘中老日法聖人御一期の折伏とて末代の行者不惜身命に唱題修行い

たすべきの粧ひを殘し奉らんと御彫刻ありし尊像なり所以ありて當山開基玄龍院日椿聖人三州の産にて天正年中已來奉二守護一靈驗あらたなる尊像なり當山は開基已來　御建立寺にて始めは神田湯島それより此地へ御替地にて元祿十一寅年不レ殘類燒いたし又候寶永三戌年本堂幷方丈向不レ殘　御建立然るに享保三戌年類燒いたし是まで　御建立の御由緒を以七間二十間四間二八間の角家　御府内宗門一の大堂建立仕來候處明和九辰年不レ殘類燒仕候然れ共寛政五丑年本堂寶建仕候へば又候文化三寅年類燒仕候二付一トむかし餘り時節を見合セ居候處一昨年風と建立の企に取かゝり先可なり寶立仕候開基已來都合四度の類燒然れ共　御尊牌御朱印等は住寺奉二守護一立除候右の靈佛も都合四度の類燒を遁れ就中文化三寅年類燒の節誰出し奉る共なく不思議に裏の藪の中に止りたてまつり夜明前よりしきりに藪の中に飛火のごとくあかるく見わたし驚て手譯いたし水をかけ或は棹竹等を以防見れば右の靈像なり抱き奉れば輕々と被レ成二御成一右ゆへ燒殘りし勝手の土藏

へ假作事出來まで奉二安置一其上ならずさる　御屋敷の何某の子息の女房疱瘡の時も醫療手を盡すといへ共今や命危うしと申來り此尊像の寶前にて五六人誦經いたし定業亦能轉の御祈禱幷護符三粒認め急ぎ使者に相渡し早速持かへり病人の口を割清水へ火打かけ頂かせ候へば息吹かへし忽然と薄紙をへぐがごとし又去ル旦家の内に懷妊にて極難産の女中都合四五軒其内に胎内の子死したるもあり足を出したる有極大病の所命越の祈禱を賴れ是又七八人寶前にて祈念仕候へば死病にて危く候者共平愈仕候扨また毎年十月十一日會式盛物いたし其内壹人盛物の餅さし串手のひらへ立候節靈佛へ申上候にはかく右の手はたらき不申候ては御法事相勤がたく候ゆへ何とぞ今晩中ニつかはされ候樣ニ御守被レ下と祈念仕候翌十二日には痛もなく平生のごとくに相成候其外御利益あげてかぞふべからず全く寺號相續の靈佛と奉レ崇往古より代々住寺の内佛に奉二安置一此度本堂再建立更に成就の福なる事を朝暮念じ奉り困世稀なる大望も成就可レ仕哉莫大の御利益を蒙り奉る尚又

右の外ニ涅槃像の大幅是又其年の二月十五日涅槃會相仕舞本堂に差置候處類燒程過て裏の庭に上覆の箱より表具まで焦げ中の繪像別條なく餘り不思議の事ゆへ參詣の衆中火除の涅槃像と申傳也右等の感應あらたなるゆへ自他の男女結緣のため於二自坊一開帳せしむるものなり現世には不祥の災難を遁れ安樂產福子をもうけ官祿永久の福をゑ後生には本果證法の厚緣を結び玉へ經曰我不愛身命但惜無上道の南無妙法蓮花經御書曰法花經弘るならば屍却て重かるべし屍重くなるならば此屍に利生有べしと云云令法久住の大願を成就せん功德廣大ならん參詣の貴賤信力堅固所願滿足重門高樓閣男女皆充滿ト云爾

伏願　天長地久　國土安穩　一天四海
皆歸妙法　自他俱安　同歸寂光

皆　文政二己卯年五月

157
107

No.

昭和七年九月一日印刷納本
昭和七年九月五日發行
「限定壹百部」

不許複製
奥山
第十六

編輯兼發行者　磯ケ谷孝治　東京府和田堀町和泉二四三番地
印刷者　宮西外次郎　東京市麹町區三番町六十九番地
發行所　明元社　東京府淀野川町中里一五一番地
印刷所　邦文舍　東京市麹町區三番町六九番地

夢寶買